

# MONSTER HUNTER μ 's

『シュウヤ』

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

モンハンとラブライブのクロスオーバーです。設定としては、2ndGをベースにし  
ています。ダブルクロス？ ワールド？ フロンティア？ ナニソレオイシイノ？

目

次

狩猟解禁！

忍び寄る影

ボッケ村

怪鳥襲来！

勇気の旋律

問題児ハンター

56 46 36 29 19 1



# 狩猟解禁！

ドンドルマより東。テロス密林に、三人の人影があつた。  
各々武器を持ち、ある一方を睨んでいた。

「ギヤアー！」

その先には、全身を青い鱗で覆われた、大きなトサカを持つたトカゲのようなモンスター。

「来る……！」

「ギヤアツ！」

飛びかかってきた大トカゲを、一人が背丈ほどもある大きな剣の腹で受け止める。ほんの少しだけ後退したが、そこで踏みどまる。

「……やつ！」

そこへ、側面からナイフのような小さな片手剣で斬りつける別の人影。

「ギイウ……！」

それを鬱陶しそうに、大トカゲは横を向く。

「そこだ！」

そのガラ空きの横つ腹に、大剣の強烈な一撃が叩き込まれる。

「ギヤギヤツ!?.?」

大トカゲが怯んだ所で、

「できました！ こつちです！」

二人の背後から、声が飛んだ。それを聞いた二人は、顔を見合させて頷き、走り出す。当然、背後から大トカゲは追つてくる。

「さあ、早く！」

二人が走る先では、大きな弓に矢をつがえるもう一人の姿が。

「よろしく！」

「つは！」

勢いよく放たれた矢は、大トカゲに吸い込まれていく。そして、その猛攻に速度を緩めた大トカゲの足元で、スパークが巻き起こつた。

「ギイツ!?.?」

不自然な体勢で身体が止まり、小刻みに悶える大トカゲ。

「さあ、今です！」

弓を持った人物が、横を駆け抜けた二人に声をかける。

「やつ！」 「えいつ！」

二人はその声とほぼ同時に、何かを投げつけた。

「ギヤウ……」

それは大トカゲへ命中すると、薄い煙を撒き散らし深い眠りへと誘つた。

「やつたあ！　ドスラン。ボス捕獲成功だよ！」

「やつたね穂乃果ちゃん！」

「ことりちゃんのナイスサポートのおかげだよ！」

大剣を持つ穂乃果と呼ばれた人物と、片手剣を持つことりと呼ばれた人物はハイタッチ。

「ちつともよくありません！」

そこへ、鋭い声が飛んだ。

「海未ちゃん……？」

海未と呼ばれた人物はポーチの整理をしながら、厳しい視線を向ける。

「ドスランボスにシビレ罠と捕獲用麻酔玉を使って……。コストが高すぎます」

「えくでも、『その方が確実だ』って言つたの海未ちゃんじやん！」

「そのはずだつたんです。あなたが支給された物資以外を使い込まなければ、でしたが。

穂乃果！」

ビシッと指さされた穂乃果は、一瞬気圧されるもすぐに反撃する。

「だつて私は剣士だもん！ 遠くから狙う海未ちゃんとは違うの！」

「それならことりを見習いなさい！」

「ことりちゃんは、片手剣だもん……。穂乃果より武器が軽いじやん！」

「あなたが無鉄砲に突っ込むから、余計なダメージを負うんです！ もつとモンスターの動きを見極めて、慎重に立ち回って下さい！」

「海未ちゃんも大剣やれば穂乃果の大変さが分かるよ！」

「やらずとも、穂乃果の動きに無駄が多い事は分かります！」

「あ、あの、二人共そのくらいで……」

モンスターの鳴き声がなくなつた密林で、人間の言い合いが青空に吸い込まれていった。

穂乃果、ことり、海未の三人はギルドの馬車に揺られながら、ドンドルマへ到着した。

「今日もくたびれましたね」

「だね！ 美味しいご飯食べて、ゆっくりしたいなあ」

「さつきのクエストでお金貯まつたから、武器作つてくるね！」

「穂乃果……話聞いてましたか？」

「早速導火線に火が付いた海未を、

「ま、まあまあ海未ちゃん。ことり達も、新しい装備作れそうだよ？」  
ことりが即座に鎮火する。

「はあ……そうですね。そうしますか」

穂乃果が動き出した時点で、そもそも止める事は不可能だと海未も知っている。

加工屋に向かつた三人は、それぞれ武器の強化に必要な素材と、通貨のGを差し出す。

「えーっと、”鉄鉱石”六個と、”マカライト鉱石”一個、あとは”大地の結晶”五個  
……それと千四百G！」

穂乃果は持つていた『バスターソード改』を加工屋に預ける。

「私は、”鉄鉱石”三個に”マカライト鉱石”一個と、”大地の結晶”三個、あとは八四十Gだね」

ことりは、『ハンターカリンガ改』を手渡す。

「私は……まだ素材が足りませんね」

「何が足りないの？」

新しく『バスターブレイド』を受け取った穂乃果と、

「まだ会つた事ないモンスター？」

『アサシンカーリングガ』を受け取つたことりが顔を向ける。

「はい。『ドスギアノスの爪』という素材が必要なようです」

「ドスギアノス？ 確か、寒い地方に住むドスランポスの仲間だよね？」

「ええ。仕方ありませんね……。明日、ドスギアノスを狩りに行きましょうか」

「うん！ 早く海未ちゃんの武器も強くしたいもんね！」

「お願ひします」

その日はそれで宿に戻り、各自床についた。

翌日、ドンドルマの中央集会所へ三人は集合。ドスギアノスを狩つて欲しいという依頼書を手に取ると、クエストを受諾する。

準備を終えて出発しようとした所へ、

「ちょっといいかな？」

背後から声をかけられた。

「あ……ギルドの……」

そこにいたのは、何度か見かけた事のあるギルドの所属の男だつた。

「何か私達に？」

「うむ、君達は、ドスギアノスを狩りに行くようだね？」

「ええ、そのつもりです」

「という事は、フラヒヤ山脈へ向かう」

「そう……ですね。あの、それが何か?」

男の意図が分からぬ海未は、受け答えしながら首を傾げる。

「君達は、ポツケ村という村を知つてゐるかな?」

「確か……フラヒヤ山脈近辺にある、山岳地帯中腹にある村だつたかと」

「うむ。実は、そこに赴いて、専属のハンターとなつてもらいたいのだ」

「「「はい?」」」

三人揃つて、首を傾げる。

「現在ポツケ村には、専属ハンターが二人いる。しかし、どちらも駆け出しで、村の安全を全て守るには不安だし負担も大きい。そこで、お三方にはポツケ村へと赴いて村を守つて欲しいのだ」

「なるほど……。そういう事でしたら、分かりました」

少し思案顔の海未だったが、事情を把握し大きく頷いた。

「おお、本当か。お二人も、それでよろしいか?」

男は穂乃果とことりにも目を向けたが、

「もちろんです!」

「頑張りますっ」

肯定が返ってきた。

「では、私から手配しておこう。ポツケ村には、年老いてはいるが聰明な龍人の村長がいる。村に着いたら、その方を訪ねるといいだろう」

「はい、ありがとうございます」

「いやなに、礼を言うのはこちらだ。よろしく頼むよ」

そう頭を下げるが、男は去つて行つた。

「ポツケ村だつて」

「どんな所なんだろうね？」

「それより先に、ドスギアノスの狩猟ですよ。今の内に、事前の情報を確認しておいて下さい」

海未は、二人に生態についての書類を渡す。

「はーい」

テロス密林よりさらに北。フラヒヤ山脈へ到着した三人は、BC（ベースキャンプ）の支給品が入ったボックスから、それぞれ必要な物資をポーチに詰める。

「いいですか、ドスギアノスの動きはドスランポスと殆ど同じ。ですが、ここは年中雪が降り積もる雪山です。充分に用心して下さい」

海未の指示に、穂乃果とことりは頷く。

「さあ、行きましょうか」

BCから出た三人は、段々になつた岩を登つて山の内部へと入る。

「ううつ……やつぱり寒いね……」

絶えず冷風が吹き付ける内部の洞窟は、壁は凍りつき頭上には巨大な氷柱が垂れ下がつていた。足元に積もつた雪のおかげでスリップは免れているが、凍えるような冷気はどうしようもない。身体の体温を保つ為に、スタミナが減つていくのを感じた。

「その為のホットドリンクです」

三人は、赤い液体の詰まつた瓶を取り出し飲み干す。

にが虫と調合する事で薬膳効果を持つたトウガラシの成分が、身体を内側から温める。

「ふう……あつたまる~」

「だね~」

白い息を長々と吐き出す穂乃果とことり。

「のんびりしてゐる場合ですか。早く行きますよ」

言うが早いか、海未はすでに歩き始める。

「もう、海未ちゃんつたらせつかちなんだから……」

「まあまあ、クエストにはギルドが定めた時間があるんだし、急ぐ?」

三人は山の内部を抜け、山頂付近へ出る。

チラチラと雪が降る中、三人は討伐対象を探す。

「……いました」

先行する海未が、二人を手で制す。

前方を見やると、人間より一回り大きい、白い鱗に覆われたトカゲのようなモンスターが闊歩していた。

「あれがドスギアノスかあ……」

「その周りにいるのが、ギアノスだね」

ドスギアノスの周りには、やや小さいサイズの同じようなモンスターが飛び回っていた。

「基本的な立ち回りは、ドスランポスの時と同じです。寒い地方に適応した攻撃方法もあると思うので、それには注意して下さい」

「了解!」「うん!」

「さあ、行きますよ！」

海未の言葉を合図に、三人は飛び出す。

「ギュイ？ ギュイ！ ギュイ！」

すぐにドスギアノスに気付かれ、臨戦態勢を取られる。

「よーし……！」

穂乃果は正面から駆け寄ると、背中の強化された大剣を掴み真っ直ぐ振り下ろした。間一髪のバックジャンプで躲されたが、

「まだまだ！」

そこから身体を捻ると、横薙ぎに斬り払う。今度は、命中し鱗を削る。

「ギュイイイ！」

すかさず反撃に出るドスギアノス。鋭く伸びた爪を、振り下ろしてくる。

「穂乃果ちゃん！」

そこへ、ことりが飛び込んでバックラーで防ぐ。

「ことりちゃんナイス！」

反動で仰け反ることりの背中を、穂乃果は支える。

なおも追撃を試みるドスギアノスへ、

「はあつ！」

海未の弓が射抜く。

堪らず怯んだドスギアノスは、

「ギュイイツ！ ギュイイツ！ ギュイイツ！」

空に向かつて吠える。

「ギアノスを呼んでいるようですね……。不利な状況になる前に、叩きましよう！」

海未は矢をつがえると、引き絞つて放つ。ことりも細かい連撃を繰り出し、ドスギアノスを攬乱。その隙を突いて、穂乃果が重い一撃を叩き込んだ。

「いいペースです。これなら……」

海未が呴いた直後、

「ギュイ！」

ドスギアノスが高く跳び上ると、海未目掛けて発達した後ろ脚をぶつけて来た。

「くつ……！」

ギリギリで回避した海未は、受け身を取つて転がる。

「すぐに距離を……つづり？」

立ち上がりつて駆け出そうとした海未を、背後から小さな衝撃が襲つた。ダメージこそ少なかつたが、不意を突かれて膝をついてしまう。

慌てて顔を上げると、

「…………」

黄色い爬虫類の眼光と目が合つた。

ドスギアノスは口を開くと、何か白い塊を吐き出した。

「海未ちゃん！」

それは、割り込んできた穂乃果へと直撃した。

「穂乃果!!?」

「え……う、動けないよ!!?」

白い塊が直撃した穂乃果を、一瞬にして白い氷が覆つた。

歩けばするものの、膝下が辛うじて動く程度で、走る事すらできない。

「落ち着いて下さい！　すぐに除去しますから！」

慌てふためく穂乃果に海未は矢を一本握ると、思い切り横に薙いだ。

「うひやつ！」

その一撃で、氷は砕けて穂乃果は自由を取り戻した。

「ありがと海未ちゃん」

「対処しておくようにと言つたじゃないですか！」

海未の叱咤が飛んだ時、

「二人共危ないっ！」

「ギュイイツ！」

ドスギアノスの強烈な蹴りが襲つた。

「うわっ！」「ぐつ……！」

直撃を受けた二人は、吹き飛ばされて雪原を転がつた。なおも追撃を仕掛けようとするドスギアノスへ、

「させないもん……！」

ことりが駆け寄り、『アサシンカリンガ』を振りかぶつた。

飛び上がつての斬り降ろし、そこから逆袈裟に斬り上げ、もう一度斬り降ろし左から右へ薙ぐ。大きく踏み込んで刃を振り下ろすと、最後は自身を回転させて斬り払つた。

「ギュイツ……！」

怒涛の連撃に怯んだのか、ドスギアノスは背を向けると岩肌の影に姿を消した。

「エリアを移動したみたい……」

ことりは安堵すると、

「穂乃果ちゃん！ 海未ちゃん！」

すぐに二人に駆け寄つた。

「大丈夫？」

「うん、穂乃果は何とか。それよりも海未ちゃんが……」

「私も問題ありません。少し攻撃を受けただけです」

「でも海未ちゃん、ガンナー装備は……」

穂乃果やことりのような剣士装備とは違い、弓を扱う海未のガンナー装備は軽量化を重視しその分装甲が薄くなっている。同じ素材を使つても、防御力は半分ほどにしかならない。

「まだ、ダウンするほどのダメージではありませんよ。安心して下さい」

海未は真っ直ぐ一人を見つめると、気丈に立ち上がった。

「海未ちゃん……無理はしないでね？」

「それはむしろ、私から穂乃果に言いたいですよ

「酷いよ海未ちゃん！」

海未はギルドから支給される応急薬を嚥下すると、自身の回復効果を高める。

「ふう……さあ、行きましょう。ホットドリンクの効き目もそろそろ切れるでしょうから、飲み直しておきましょうか」

隣のエリアでドスギアノスを発見した三人は、総攻撃を仕掛ける。

ことりが攪乱し、ドスギアノスが動くタイミングに合わせて海未の矢が飛来し、生まれた隙に穂乃果が一撃を叩き込む。

そんな応酬が五分ほど続いた時、

「つせえい！」

ことりと海未の攻撃に横を向いたドスギアノス目掛けて、振りかぶつて限界まで力を溜め込んだ穂乃果の一振りが襲つた。

「ギュイツリ!? .....ギュア.....」

その一撃に耐えられなかつたのか、ドスギアノスは力なく弾き飛ばされると痙攣して動かなくなつた。

「やつた.....。倒したよ！」

「うんつ、やつたね！」

「お疲れ様です」

三人は駆け寄ると、右手を掲げてハイタッチ。笑顔を見合させた。

それから討伐したドスギアノスから素材を剥ぎ取り、成果を確認する。

「ふむ、どうやら無事素材は集まつたようですね。これで武器を強化できます」「ホント? やつたね!」

「じゃあ、帰ろつか。ドンドルマ.....じゃなくて、ポッケ村に!」

「はい!」「うん!」

三人がいた狩場から、少し離れた場所にて。

「待つてよ～……」

「早く早く～！」

「そんな急がなくとも、ポポは逃げないよお」

「でも麓にいなかつたから、早くしないといなくなつちゃうかもよ？」

「それは……どうしてだろう？ こんな山頂近くまで見つからないなんて……」

「まあまあ、そんな事考えても分からぬいし、探そ探そ？」

「うん……」

「あ、噂をすれば、あそこにポポが！」

「あ、ホントだ。良かつたあ……つて、これ……やられてる？」

「まさか、他のハンターさんに討伐されちゃつたの！？」

「うーん……狩場は被らないようギルドが調整してるはずだし、わざわざ草食モンスターを倒して放置するのも変だし……剥ぎ取りもされてないもん」

「じゃあ、誰が？」

「それは分からぬけど……」

「ギアノスとかかなあ？」

「ギアノスも全然見なかつたから、多分違うと思……」

「どうしたの？」

「……なんで、ギアノスが一匹もいないの？」

普段なら、群がつてもおかしくないのに

「……」

「…………つ？ う、後ろ……」

「後ろ？ 何かいたの？」

「ゴオオオオオオオオオオオオオツ！」

「（き）やああああああああああつ！」

# 忍び寄る影

ポツケ村、入り口。

「ほえ、ここがポツケ村かあ」「落ち着いた、いい雰囲気ですね」

「私、こういう所、好きだなあ」

ドスギアノスを狩った穂乃果、海未、ことりの三人は、ポツケ村に到着した。土だらけの道は乾いているが、雪山の麓にあるからか所々に真っ白な雪が残っている。

村の中心辺りから湧き出る温泉が、この村のライフラインなのだろう。ゆっくりと水車が回っていた。

「む、君達が新しくこの村に配属されたハンターだな？ 村長が待ちわびていた。早く行つてあげるといいだろう」

村の入り口で、男が話しかけてきた。

「申し遅れた。私は、この村の元ハンターだ。今は引退して、現役ハンターの補助をしている。ちょうど、二人の新米ハンターが配属されたばかりだからな」差し出された手を握り返しながら、穂乃果達も自己紹介をする。

「穂乃果にことりに海未か。これからよろしく頼む。村長なら、端っこにあるでつかいマカライト鉱石の前にいるから、挨拶してくるといい」

男が指差した先には、人の背丈を越える巨大なマカライト鉱石が。その手前で、小さな焚き火から狼煙が上がっていた。

「村長さーん」

三人が側まで行くと、竜人族の老婆がゆつくりとこちらを向いた。その横には若いネコ族、アイルーが佇んでいたが、

「よく來たね」

村長が話し始めたのでアイルーが何者かという疑問は棚上げされた。

「私がポツケ村の村長だよ。聞いているとは思うけど、この村にはハンターが新米の二人しかいないくてね。頑張つてはいるけど、正直あの二人だけに任せるのは荷が重いだろうという事でお前さん達を呼んだんだよ。自然以外何も無い所だけど、ゆつくりしていっておくれ。それからこの村を、よろしく頼むよ」

「「「はい！」」

元気よく返事をする三人。

それから、

「あの、その例の二人のハンターは、今はどこに？ これから一緒に過ごす訳ですし、挨

拶をと思ひまして

海未が訊ねる。

「ああ、二人なら今はクエストに出ているよ。簡単なクエストだから、そろそろ戻つてくると思……」

「た、大変だあつ！」

村長の声を遮つて、すぐ横の村の出口から男が一人駆け込んできた。

「どうしたんだい？」

「あ、村長……。実は……この村のハンター二人が、狩場の山頂付近の崖の下で見つかつたんだ」

「なんと。二人は無事なのかい？」

「ああ……怪我はそこまで酷くないんだが、結構長い間雪に埋もれてたせいか凍傷一歩手前で……」

「ふむ……分かつた。ひとまず、集会所へ運ぶように。暖炉を盛大に燃やして、身体を温めるんだよ。毛布もあるだけ出してね」

「わ、分かつた！」

男は頷くと、伝達すべく駆け出した。

「「…………」」

突然の出来事に言葉が出なかつた三人に村長は向き直ると、

「さてお前さん達、慌ただしくて申し訳なかつたね。何やら想定外の事態のようだ」  
落ち着いた口調で話した。

「あの、私たちに、何かできる事はありませんか？」

「穂乃果ちゃん？」

「看病とかは、した事ありませんけど……荷物運びとか！ 何か大変そうなのに、穂乃果達だけノンビリするなんてできません！」

「確かにその通りですね。村長さん、何か私たちにも指示をお願いします」

海未も進み出て、ことりもコクコク頷く。

「ふむそろかい？ ジやあ、あの子達のクエストを、代わりに受けてもらえるかい？」  
「それは……どういう事ですか？」

意図を汲み取れない海未は、首を傾げる。

「あの子達が行つていたクエストは、雪山草を採取してくるだけの簡単なクエストさね。障害になるのはギアノスかブランゴ、せいぜいブルファンゴくらいさ。山頂付近まで彷徨つて遭難するようなクエストではないんだよ」

「なるほど……。つまり、何か異常事態が発生した可能性があるという事ですね？」

「そういう事さ。雪崩でも起きたのか、あるいは……」

「太刀打ちできないほどの、危険なモンスター……」

「うむ。前者なら復旧作業が必要だし、後者なら問題はなお深刻じゃ。調査、頼まれてくれるかな？」

村長の問いに、

『はい！』

三つの揃つた声が山脈に木霊した。

「……何にも無かつたねー」

「地形に変化はありませんでしたし、モンスターらしき痕跡も確認できませんでした  
……」

「ずっと吹雪だつたみたいだから、足跡とかはあつても消えちゃつたのかもねー……」

三十分ほど件の狩場を調査した穂乃果達だが、結論から言つて異常な点は皆無  
だつた。ポポやガウシカといった草食モンスター、ギアノスなどを散見したくらいで問  
題は見られなかつたのだ。

「ひとまず、村長に報告に行きましょう」

「そうだねー」

出発前から変わらず巨大マカライト鉱石の前に座る村長に、三人は異常は無かつたと報告を済ませる。村長は労いとお礼を伝えると、「あの二人、目を覚ましたようじゃ。見舞いに行つてはどうかな?」と付け足した。

容体も心配だし挨拶もしたいと、三人は道を挟んだ反対側の大きな建物に入る。村のハンターが集いチームを形成してクエストを受注する場所で、村民の酒場も兼ねているのでポツケ村では最大規模の建物である。

件の二人は、酒場の長椅子に毛布にくるまつて座つていた。すでに何人かの村民に囲まれ、何かを話していた。

「こんなにちは。一人が、この村のハンターだよね?」

穂乃果が話しかけると、二人が顔を向けた。

「聞いてるかもしれないけど、今日からこの村の専属ハンターになつた穂乃果です。こつちは、ことりちゃんと海未ちゃん」「どうも」「よろしくね~」

「あ、えっと……私は、花陽つていいます。こつちは、」

「凛だにや」

自己紹介を済ませると、三人は花陽と凛の具合を心配する。

「大丈夫にや。ちよつと慌てちゃつただけだつたから」

「焦つて崖から落ちちゃつて……下に雪が積もつてたから、怪我は無かつたんだけど……」

二人を介抱した村人も、怪我は無かつたし凍傷などの後遺症も心配いらないと告げる。

「それなら一安心だね！」

穂乃果は笑顔を見せるが、その横で海未が疑問を投げかける。

「しかし、何故崖から落ちるような事態に？ 先ほど私達も同じクエストで現場に赴きましたが、変わった様子はありませんでしたよ」  
すると二人は、驚いたように目を見開く。

「えつ？ ポポは!?」

「ポポはいましたが……襲われた様子もありませんでした」

「そんなはず……。凜達、倒れてるポポを見つけて、そしたら……」

「そしたら？」

「後ろから、見た事ないモンスターに襲われて……」

「見た事のないモンスター？ 何か特徴は分かりますか？」

「吹雪だつたからよく見えなかつたけど……、黄色っぽい色で、四本脚、大きな爪があつ

て、鋭い牙で突進してきて……」

凛の話からモンスターの姿を想像し、穂乃果はブルリと身体を震わせる。

「聞くだけで恐ろしいモンスターですね……。一体その正体は……」

「……ふうむ。それは恐らく、ティガレックスじやろうな」

突如響いた声に、全員が入り口を向く。

「あ、村長さん」

いつからそこにいたのか、村長が集団へと歩み寄ってきた。

「ティガレックス、と仰いましたか？」

「うむ。このポツケ村付近では、昔から目撃例がある飛竜種さ。原始的な見た目で、突進攻撃を得意とする手強いモンスター。最近は聞かなかつたが……そうかい、また現れたんだね」

「かく言う私も、ティガレックスと闘い引退に追い込まれた身だ」

穂乃果達を村長へと案内してくれた、元ハンターが神妙に口を開く。

「何とか追い返す事には成功したんだが、その傷が癒えてまた活動を始めたんだろう……」

「なるほど……ティガレックスですか。厄介な相手のようですね」

「今の私達で、勝てるのかな……」

不安そうなことりに、

「なあに、すぐには言わんよ。ティガレックスもまだ活発ではないようじやし、着実に実力を付けて挑むが良かる」

村長はノンビリと声をかける。

「それに、ティガレックス以外にも村を悩ませるモンスターは多いからねえ。そつちもよろしく頼むよ」

「わ、分かりました」

村長はそれだけ告げると、集会所から出て行つた。

「そうですね……ここで悩んでいても仕方ありません。私達はハンターの腕もまだまだ未熟ですし、この村で鍛錬を積みましよう」

「そうだよ！ ティガレックスだつて、きっと穂乃果達なら大丈夫だよ！」

穂乃果はグッと拳を握る。

「凛達も忘れないで欲しいにやー！ やられっぱなしは嫌だもん！」

「そ、そうだよね……。ちょっと怖いけど、私も頑張らなきや……！」

凛と花陽が元気よく立ち上がると、

「もう大丈夫なの？」

「うん！ 凛は元気が取り柄だからね！」

「穂乃果ちゃんにことりちゃんに海未ちゃん。三人を引き連れて、集会所をあとにした。

「ポツケ村を案内してあげます」

# ポツケ村

「ここはポツケ農場にや！」

「色々な鉱石や素材が手に入るんだよ」

集会所から村の反対側。勾配の多いポツケ村では比較的平坦な場所を利用して、農場が開拓されていた。

「ニヤニヤ！ 初めて見るハンターさんだニヤ！」

入り口付近にいたアイルーが、五人の元へと駆け寄ってきた。

「ボクはこの農場の管理をしてるんだニヤ。分からぬ事があつたら、何でも聞いて欲しいニヤ」

「よろしくね♪」

農場のアイルーと凜と花陽に案内され、農場の設備を見て回る三人。

「なるほど、畑では植物が栽培できるんですね。『薬草』を植えておくといいかもしれません」

「こっちの草むらで虫が獲れるのかあ。武器の素材によく使われるし、なるべく集めておかないと！」

「この壁、鉱石が沢山あるんだね。ピツケルも貸してくれるなんて優しい！」

一通り農場を見学した三人は、入り口まで戻る。

「なるほど。クエストでフィールドに出る以外にも、ここで素材を集められるという事ですか。うまく活用していきたいですね」

「ハンターさん達の頑張り次第では、より良い施設を開発できるかも知れないニヤ。頑張つて欲しいニヤ」

「よーし、じゃあ早速、クエストに行こう！」

「はいはーい！ 凜も行くよー！」

「せつかくだから、一緒に行こつか！」

「面白そうにや！」

「……凛からは、穂乃果と同じ匂いを感じます。あの二人だけでクエストに行かせるのは心配なので、私も同行します」「大丈夫だと思うけどなあ……」

はしゃぐ二人に小言を入れながら、海未は歩き出す。

「えっと……」

取り残された花陽に、

「じゃあ、花陽ちゃんは私とだね！」

「ことりが横に並んで微笑んだ。

「あ、よ、よろしくね、ことり……ちゃん？」

「うん♪ よろしくね♪」

同じ頃。

「クエエエア！」

大きなクチバシと首を一周するほど大きな耳を持つたモンスターと、二人のハンターが対峙していた。

一人は自分の頭の倍近くある鉄製のハンマーを構え、

「ほいっ！」

こちらに向き直ったモンスターの頭めがけて、まつすぐ振り下ろした。

「クエエアツ！？」

頭を搖さぶられて限界が来たのか、モンスターは脳震盪を起こして倒れもがく。  
「チャンスね」

もう一人は、こちらも鉄製の太刀を両手で構えると、大きく振りかぶり右に斬りはらい左に斬りはらい、左右から逆袈裟に切り上げると全力で振り下ろした。

めまいから復活したモンスターの反撃を警戒して、太刀を左から右へ大きく斬り払うとバツクステップで距離を取る。

「まだまだチャンスやん？」

ハンマーを持つた一人が、入れ替わるように懐へ潜り込むと回転しながらモンスターの脚を殴りつけ、

「……そうね！」

もう一人が太刀を斬り上げ斬り下ろす。そしてとどめと言わんばかりにモンスターの翼目掛けて鋭い突きを繰り出した。

「クエア……」

その一撃で体力が限界に達したのか、モンスターは力なく倒れると小さく土煙を上げた。

「相変わらず、的確な攻撃するやんなあ

「あら、それはお互い様じやないかしら？」

余裕を見せたままの二人は、仲良く談笑しながら空に浮かぶギルドの気球に手を振つた。

「——イヤンクックの討伐?」

「はい。近隣住民から、農作物の収穫に支障が出ると依頼が入つてゐるようです」

海未はクエストの依頼書を手に取つた。

「場所は、シルクオーレの森とシルトン丘陵……ですか」

「それってどこにや?」

「高低差のある丘陵地帯と、鬱蒼とした木々で覆われた狩猟場所です。私も行つた事はありませんが……モンスターを見失いやすいと聞きます」

「へー。じゃあ、ペイントボールが必要かもね!」

「そうですね。ハンターの基本です」

ドヤ顔で放つた穂乃果の一言は、海未の一言に一蹴される。

「……念の為訊いておきますが、穂乃果、凛。イヤンクックの知識は持つていますね?」

「え? そりやあ? ……ねえ?」

「そもそも勿論にや」

分かりやすいほどに目を逸らした二人。海未は小さく肩を落とす。

「……だと思いました。狩場に着くまでに、私のレクチャーを受けてもらいますからね」

「はーい」

逆らえる訳もなく。穂乃果と凛は渋々返事をした。

「穂乃果ちゃん達は、クエスト決まつたみたいだね～」

「えっと私達はどうしよう……」

花陽は、自分の実力は把握しているつもりだった。それ故に、自信を持つて選べるクエストが見つからないのだ。

「私達は、これにしようか～」

そう言つてことりが見せてきたクエストは、

「えつ、素材ツア～……？」

狩場にある素材を集めるハンターの為に用意された、特に狩猟対象のモンスターもない安全なクエストだった。

「これで……いいの？」

「うん。私は武器新調したばっかりで鉱石とか少なくなつちやつたから、集めておきた  
いんだ～。それに、無理してモンスター狩る必要もないもんね～」

見透かされていた、と花陽は自分の意気地のなさを少し悔やむ。

「――お、ことりちゃん達もクエスト決まつたの？」

準備を終えたらしい穂乃果が、二人へ駆け寄ってきた。

「素材ツア～？」

穂乃果も、意外そうな声を上げる。

「花陽ちゃんとのんびり、素材集めようって思つて。穂乃果ちゃん達は、イヤンクック？頑張つてね！」

「うん！ 穂乃果がビシツと倒してくるから、期待しててよ！」

穂乃果はグッと拳を握ると、集会所の出口へと歩いていく。

「凄いなあ……私もあるのくらい自信持てたらなあ……」

その背中を見ながら、花陽はポツリと呟く。それを側で聞いたことりは、「ハンターになるだけで、凄い事だよ♪ それに花陽ちゃんは、この村を守りたかったんでしょ？ 花陽ちゃんだつて充分凄いよ♪

「そうなのかな……。私は、凛ちゃんにやろつて言われてハンターになつただけで……」

「大丈夫だよ。きっと花陽ちゃんにも、ハンターになつて良かつたつて思う時が来るから♪」

「そうちど、いいな……」

「さ、行こ、花陽ちゃん。早くしないと、穂乃果ちゃん達行っちゃうよ」

「う、うん！」

差し出されたことりの手を取つた花陽は、おつかなびつくり歩き出した。

## 怪鳥襲来!

アプトノスが引く荷車に揺られながら、海未は穂乃果と凛に基本的な知識を指導する。

「いいですか、イヤンクックの別名は“怪鳥”。分類は鳥竜種です」

「鳥竜種？」

「飛竜種ほどの脅威は無いものの、骨格は似ていてる種です。動きも近いものが多いですし、油断はできない相手ですね」

海未はモンスター図鑑を開きながら、説明する。

「——ちなみに、あのティガレックスは飛竜種です。つまり、イヤンクックに苦戦しているようでは、とても太刀打ちできないという事ですね」

「…………」

厳しい言葉に、流石の穂乃果と凛も押し黙る。

「ですが、今なお村の脅威です。なるべく早く実力をつけて、迅速な討伐を目指したですね。……聞いていますか？ ことり」

「へへ、花陽ちゃんは狩猟笛なんだね。可愛い♪」

「そ、 そうかな……」

花陽の武器を見ながら、 ことりはニコニコ笑顔で会話に花を咲かせて いた。

「ことり……。 あなたも他人事ではないんですよ？」

海未の講義そっちのけで花陽と戯れることりに、 海未は大きく肩を落とした。

「ちゃんと聞いてたよ。 ことり達は採取ツアーダから、 大丈夫♪」

「いえ、 今回に限つた話ではなくてですね……。 いつか交戦する日に備えて準備してお

かないと……」

「——あ、 見えてきたよ！」

なおも食い下がろうとする海未を、 穂乃果の元気な声が遮つた。

「——よーし、 穂乃果が一番乗りだ！ 支給品はいただいちやうもんね！」

「あ、 穂乃果ちゃんずるいにや！」

我先にと荷車から飛び降りた二人に、

「待ちなさい！ ——花陽、 ことりをよろしくお願ひします！」

海未は惜しげに言葉を打ち切つて後ろから駆け出す。

「頑張つてね♪」

最後までマイペースに手を振つて見送つたことりは、 荷車に座り直す。

「ことり達はもうちょっと先の狩場だから、 のんびりできるね♪」

「う、うん。凛ちゃん、大丈夫かなあ……」

「穂乃果ちゃんも海未ちゃんも、頼りになるから大丈夫だよ！」

「そうだといいけど……私も凛ちゃんも、まだまだ新米ハンターだから……」

不安げに景色を眺める花陽を見て、

「ん~……」

ことりは何かを考えていた。

BCに到着した穂乃果は、支給品ボックスに納められていたアイテムを取り出す。

「穂乃果ちゃん速いにや〜」

「支給品の独り占めは許しませんよ！」

すぐに、凛と海未も追いつく。

「そんな事しないってば〜。——はい、一人の分」

穂乃果は笑いながら、等分配したアイテムを二人に手渡す。

「音爆弾がありますね」

海未が手にしたのは、黒っぽい球のようなアイテム。

「何に使うのか分からなかつたから、置いて行こうと思つたんだけど……」

決まりが悪そうな穂乃果にため息一つ。

「……支給品にあるという事は、音爆弾が有効な相手という事です。さあ行きますよ」  
音爆弾をしつかりポーチに詰めると、海未は先導してBCを出る。

段差の激しい丘陵地帯を抜けると、その先は鬱蒼とした木々が生い茂る。

「視界が悪いですね……。死角からの不意打ちの警戒も必要ですね」

海未が茂みをかき分けると、

「ブルル……ツ」

茶色い体毛に覆われたイノシンが、突進態勢に入っていた。

「つ……!?」？ ブルフアンゴ……!?？」

海未は回避しなければと判断はしたものの、唐突すぎて身体が追いつかない。  
「海未ちゃん、危ないにゃ！」

すかさず間に入った凜が、左手に持つ大きな盾でブルフアンゴの突進を受ける。  
ゴツ、と鈍い音がして勢いを止められたブルフアンゴに、今度は右手に持った槍で突く。  
一刺し、二刺し。三刺し目で、ブルフアンゴはたまらず倒れ伏せた。

「海未ちゃん、大丈夫？」

「ええ……助かりました、凛。ありがとうございます」

無理な回避で態勢を崩していた海未は、差し出された凛の手を握る。

「お安い御用にや！」

「凛ちゃんのランス、カッコいいねえ！」

「えへへ、でしょ！」

凛は『アイアンランス』を掲げてみせる。

凛が持つ武器は、ランスと呼ばれるカテゴリ。一メートルほどもある大盾と、背丈を越える槍を備えた重装備。

「正直、凛の性格とはミスマッチだと思いました」

「凛もそう思つてたんだけど、村のハンターさんに『活発でよく動く人ほど、ランスと相性がいい』って言われて。このランスも、あの人のお下がりなんだよね♪」

穂乃果と海未は、村で出迎えてくれた引退したというハンターを思い出していた。  
「ハンターの役目は、モンスターを狩猟するだけではない……。後継者を育てるのも、重要な役目なんですね」

急に頼もしく見えてきた凛の背中を見ながら、海未は村のハンターに心の中で謝辞を送った。

「——いました」

給料地帯の開けた場所に、目的のモンスターはいた。

赤やピンクがかつた体色に、大きなクチバシ。細い首全体を一周する大きな耳は、今は畳まれていた。一見すると可愛らしい印象も受けるが、立派な翼と体躯を支える脚は発達しており紛れもない大型モンスターとしての風貌も漂わせている。

「体内には『火炎袋』と呼ばれる発熱器官も備えており、炎を吐く事もあるそうです。ハンターの登竜門とされているモンスターではありますが、私達は大型モンスターの狩猟は初めて。……油断なく行きますよ」

海未はモンスター図鑑をしまうと、イヤンクツクへと向けていた視線を穂乃果と凜に移す。

「…………」

穂乃果と凜も、ゆっくり頷く。

「——では行きます！ 穂乃果は斬り込み、凜はそのフォローを！ 私は後方から援護射撃を行います！」

「うん！」

「任せるにや！」

茂みの影から飛び出し、イヤンクツクへと走る三人。

「――！ クエエエアッ！」

イヤンクツクもすぐに気付き、折り畳んでいた耳を開いて警戒態勢に入る。

「――せつ！」

接近した穂乃果が大剣を構え、全力で斬り下ろす。そのまま勢いを殺さず脚の横を抜けるように前転すると、イヤンクツクの後方に出る。

「――こっちにや！」

穂乃果へ振り返ろうとしたイヤンクツクへ凛もランスを構えると、その鋭い切っ先を翼へと叩き込んでいく。

一突き、二突き、三突き。的確に同じ場所に鋭い攻撃を入れていく。

「クエアアツ！」

イヤンクツクがその大きなクチバシをブンブン振り下ろすが、凛はその直前に左側へ一步ステップし回避する。

「ほう……新人ハンターなどと言つていました가、動きは様になつてゐるぢやないですか」

海未は少し感心しながら、矢をつがえ弦を引き絞る。

放たれた矢は、寸分違わずイヤンクツクの頭へ吸い込まれていく。

遠距離攻撃を受け煩わしそうに視線を海未へ向けるが、

「――とりや！」

背後にいた穂乃果が尻尾へ斬り下ろす。

「クエアアツ！」

イヤンクツクはその場で回転すると、尻尾を鞭のようにしならせてぶつけてくる。

「うひやつ！」

間一髪で範囲外へ跳んだ穂乃果と、

「にやつ」

盾でガードしやり過ごす凜。

二人の猛攻を止めたイヤンクツクは、その場で跳躍すると翼の推進力も利用して海未へとクチバシを突き出した。

「狙いを私へ変えてきましたか。ですが見切っています！」

海未は斜め前へ前転すると、危なげなく回避する。

三人揃つてイヤンクツクから距離が開く。

「行けそうな感じ！」

一番遠い位置にいた穂乃果は、すぐに駆け出す。

「クアツ！」

それとほぼ同時に、イヤンクツクも地面を蹴る。

「えつり!?」

猛スピードで突進してくるイヤンクックへ自ら突っ込む形となつた穂乃果は、その翼へぶつかり吹っ飛ばされる。

「ぐつ…………！」

「穂乃果！」

「穂乃果ちゃん！」

地面をゴロゴロ転がった穂乃果は、すぐに立ち上がる。

「だ、大丈夫！」

「まつたく無茶をして……！　すぐに回復しなさい！」

海未は穂乃果とイヤンクックの間にいると、武器をしまってポーチに手を入れる。

「……あの大きな耳、もしかしたら……」

そこから支給品の一つを取り出すと、イヤンクックへ向かって放り投げる。

キイ——ンツ。

甲高い高周波の音が響き渡り、

「クエッ?!？」

イヤンクックは放心するとフラフラとおぼつかない足取りでその場で揺れ始めた。

「やはり……！　あの大きな耳は、それだけ爆音に弱いという事ですか」

海未は推測が当たっていた事に頷くと、すぐさま武器を取り出して矢をつがえる。そ

の脇を、走り去る人影。

「ありがとう海未ちゃん！」

「モンスターの挙動はよく見て下さいよ」

「分かつてる！」

穂乃果は大剣の持ち手を掴むと、背中に構えてグッと力を溜める。収縮するバネのように込めた力を、

「——どりやあ！——

一気に解き放つ。渾身の力で振り下ろされた大剣。そこから流れるような動きで身体を横に捻った穂乃果は、勢い殺さず今度は横向きに斬り払つた。

「グググ……クアアアアアーッ！」

ようやく我に返つたイヤンクックは、翼を大きく広げてその場で小さく飛び跳ねる。

「うわっ」「にやつ！」

穂乃果と凛はその脚に引っ掛けられて尻もちをつく。よく見ると、クチバシから赤い炎が漏れている。

「どうやら怒らせてしまつたようですね。——穂乃果、凛！ 気を抜かずにいきますよ

！」

「うん！」「勿論にや！」

# 勇気の旋律

穂乃果、海未、凜がイヤンクツクと激闘を繰り広げていた狩場から少し離れた場所では、

「——花陽ちゃん、『鉄鉱石』こんなに採れたよ~」

「わ、ことりちゃん凄い。私も、『薬草』と『アオキノコ』見つけたよ」

実に和やかに、フィールドを散策していた。

「花陽ちゃんもすこしい。ね、せつかくだから調合しちゃおうよ」

「う、うん」

“薬草”はそれ自体が食用となり回復効果を持つが、苦味が強くお世辞にも良い味とは言えず効果も弱い。

そこで“アオキノコ”的エキスと調合する事で、液体として飲みやすく、かつ格段に苦味を抑え効能も高まる。

「あ、ことりちゃんちよつと待つて」

早速調合を始めようとしたことりに声をかけ、花陽はポーチを漁る。

「一応、持つてきたの」

そう言つて取り出したのは、『調合書入門編①』と銘打たれた小さな書籍。

「ちゃんとやり方見ないと、調合失敗しちゃう事あるから……」

「花陽ちゃん、しつかり者だね♪」

ニコニコ笑顔のことりに、花陽は少し照れたように頬を染める。

「いつも凛ちゃんが引っ張つてくれるんだけど、凛ちゃん、あまり準備しない事あるから……。その癖で」

「穂乃果ちゃんも、似た感じだなあ。毎回、クエスト受注した時に持ち物チェックされてるもん」

「……海未ちゃん、怒ると怖そだよね……」

「でも可愛いよ♪」

「そ、そりなんだ……」

穂乃果、ついでに凛を叱りつける姿しか見ていない花陽には、ことりの言う『可愛い』海未が想像できない。

「——できたっ」

花陽は小瓶に詰めた緑色の液体を、ことりに見せる。

「わく、花陽ちゃん凄い♪ じゃあせつかくだから、使つてみようよ」「へ？ 使うつてどういう……」

「来てっ」

「ことりは花陽の手を取ると、引つ張つて行く。

「こ、ことりちゃん？」

ことりの意図が分からぬ花陽は、為すがまま連れて行かれる。

「——ギュイ！ ギュイ！」

狭い崖に挟まれた通路を抜けた先には、青い鱗を持つたランポスが数体闊歩していた。二人の姿を見つけた瞬間、威嚇のように数回吠える。

「ことりちゃん……？」

何となく察した花陽は、恐る恐ることりを見る。

「討伐してみよっか♪」

案の定笑顔で振られた言葉に、

「…………！」

花陽は無意識に首を横に振った。

「む、無理だよ！ 私、モンスターと闘つた事ないもん……」

「じゃあ、今日が初めてだね♪」

あくまで、ことりは譲らない。

「どうして……？」

「花陽ちゃんがハンターだから、だよ」

笑顔のまま、ことりは口を開く。

「今は私もだけど、花陽ちゃんはボツケ村を守るハンターだもん。少しづつでも、強くならないと」

「でも……」

なおも渋る花陽に、

「——よしよし」

ことりはその頭を撫でる。

「花陽ちゃん優しいね。だから狩猟笛を選んだんでしょう？」

「！」

「凛ちゃんを守れるようにならないと、だよつ」

「私が、凛ちゃんを守る……」

「やつてみよ？」

「う、うん……！」

恐々と頷いた花陽は、背中の武器を構える。

それを見たことりはニッコリ笑うと、自分も『アサシンカリンガ』を抜く。

「……そうだ、凛ちゃんは今、大型モンスターと闘ってる……。私だけ、ランポス相手に逃げる訳には行かない……！」

花陽は大きく息を吸い込むと、《ボーンホルン》へ息を吹き込む。

力強い旋律が響き、その音は明確に二人に力を付与する。

「何だか……疲れなくなつた気がする！」

ことりは軽量である片手剣の特徴を生かし、走り回つてランポス達を撹乱する。そしてランポスの注意がことりへ向いた瞬間、

「——やつ！」

花陽が武器を振り上げた。右から左上へ振り上げ、すかさず左から右へ振り払う。鼓舞した旋律が効果を失う前に、再度息を笛へと吹き込む。

攻撃を受けたランポスは未だ健在で花陽の前に立つていたが、

「ギュア……ギュア……」

重い二連打を頭に受けて眩暈を起こしていた。

「——たつ！」

そこへ走り込んだことりが、身体を一回転させて斬り払う。倒れたランポスを一瞥すると、飛びかかってきた二体目のランポスへと、

「ええええいつ！」

全力で振りかぶった一撃を振り下ろした。

あまり重くない手応えと、衝撃。弾き飛んだランポスが、動く事はなかつた。

「——穂乃果！」

「分かつてやる！」

海未の声を聞くが早いが、穂乃果は地面を蹴つて右へ跳ぶ。

激昂したイヤンクツクは、何かを吐き出すように大きく口を開いた。一瞬前まで穂乃果が立つていた場所に、火柱が上がる。

「やはり、火炎攻撃は危険ですね……」

海未が矢を放つた直後、それを受けながらも突貫するイヤンクツク。

「——はつ！」

海未はギリギリまで引きつけ、横つ飛びで回避。接近を許してしまつたイヤンクツクの攻撃範囲外へと距離を取る海未とは逆に、

「凛に任せんにやあああ！」

凛は姿勢を低くすると、槍の切つ先を突き出して突進。物凄い勢いで接近しブレーキをかける為に倒れ込んで低い位置にあつたイヤンクツクの頭部へと、鋭い攻撃を繰り出

した。

「クアツリ?」

その衝撃で、立派な耳が破れて穴だらけになる。それと同時に、威嚇するように大きく展開されていたイヤンクックの耳が力なく畳まれる。

「これは……」

立ち上がったイヤンクックは海未の予想通り、三人に目もくれず片脚を引きずるようにヨロヨロと逃走を図る。

「やはりもう瀕死のようですね……穂乃果！ そちらに行きましたよ！」

イヤンクックの進行方向にいたであろう穂乃果へと声を飛ばす海未。

「任せて！」

すでに両手で大剣を構えていた穂乃果は、溜めに溜めた一撃をちょうど目の前へやつて来たイヤンクック目がけて振り下ろした。

確かな手応え。強烈な一撃で風前の灯だつたイヤンクックの体力は、ついに底をつい

た。

「……ふう。イヤンクック、討伐完了ですね」

「穂乃果ちゃん！ 激しいにやー！」

「凛ちゃんも部位破壊凄かつた！ ギューンって突っ込んでバーンって攻撃して！」

お互に顔を輝かせる穂乃果と凜に苦笑する海未。

「早く剥ぎ取りを済ませますよ。クエスト達成を確認したギルドの迎えが来てしまいます」

「はーい」

「ことりと花陽は、どうなつたんでしょう？」

三人がギルドの迎えと合流した頃、ことりと花陽はBCにいた。

「えーと、『鉄鉱石』に『特産キノコ』、『マカライト鉱石』。それから……」

「『ランポスの鱗』……」

獲得した素材を確認していた花陽は、自分の手の中にある素材を見つめていた。

「本当に、ランポスを倒したんだ……」

「花陽ちゃん、凄かつたね！ 新米ハンターとは思えない動きだったよ！」  
隣で覗き込むことりも、優しく笑う。

「立ち回り方とか、旋律とか、勉強はしてたから……」

「うんうん、やっぱり偉いね！」

花陽は自ら獲得した素材を大切にポーチに仕舞うと、

「ことりちゃん、ありがとう」

「どうして？」

「私、ことりちゃんのおかげで勇気出せた。ずっと怖かったけど、ことりちゃんと一緒だつたから。私、頑張れたよ」

少しだけ誇らしげな、しかしまだ自信満々には程遠い表情の花陽に、

「今は、そういう事にしておくね♪」

ことりは、優しく微笑んだ。

時を同じくして、

「——はーやつと終わつたわ。……支給品専用の道具、何で持ち帰つちゃいけないのかしら。これを貯められたら、お金かなり浮くのになあ……。ギルドつて変な所ケチよね……」

クエストを終えた一人の少女が、ケチつた結果余つてしまつた支給品専用アイテムを眺めながら愚痴つた。

「仕送りして、宿代払つて、……あー、これは今日もご飯はくず肉になりそうね。仕方ないか……」

何やらお金の計算をし、空を仰ぐ。

「ドンドルマはクエストの種類は多いけど、その分ハンターも多いから美味しいクエストの確保難しいのよね……。拠点移そうかしら……でも他にいい場所なんて無いわよね……。はあ……」

深々としたため息は、誰に届くでもなく空気に溶けていった。

# 問題児ハンター

「ダイミョウザザミ?」

集会所で、穂乃果とことりは海未の顔を見た。

「はい。テロス密林にて、狩猟の依頼が来て います」

テーブルに依頼書を置く海未。

「いいじやん! やろうよ!」

力強く拳を握った穂乃果に、

「そう言うと思いました」

海未も立ち上がる。

「そういえば花陽ちゃんは? まだ寝てるの?」

ことりは頷き、

「うん。昨日凄く頑張つてたから、その疲れが出たんじゃないかな。凛ちゃんも、花陽ちゃんが起きるまでは側にいるつて

「そつか。じやあ、今日は三人でのクエストだね」

「——ああ、その事なんですが」

凛ちゃんも、花陽

穂乃果を遮るように、海未が手を挙げた。

「実はこのクエスト、現地でもう一人ハンターが合流します」「……どゆこと?」

穂乃果は首を傾げた。そんな話、今まで聞いた事もない。

「元々このクエストはドンドルマの方で掲示していたらしいんですが、受注する者がいなかつたのでポツケ村に回ってきたんです。ところが、ポツケ村に依頼した直後に、ドンドルマの方で受注したハンターがいたそうです。その事をポツケ村へ伝令を出すのも時間がかかるし、依頼書そのものを撤回する訳にもいかず。止むを得ず、特例として二つの場所からハンターを派遣する事になつたそうです」

「ほえ、そんな事が。そのハンターさんってどんな人なんだろう?」

「こればっかりは、現地で合流してみないと分かりませんね。この特例を了承したくらいですし、多少は融通の利く方だとは思いますが……」

「まあ、とにかく行つてみようよ!」

クエストの手続きを済ませた穂乃果は、集会所出口へ駆け出す。

「あつ、待ちなさい穂乃果! 事前の準備は——」

「さつき終わらせてたよ!」

呼び止めようと手を伸ばしかけた海未に、ことりが声をかける。

「ことり、本当ですか？ いつの間に……」

「凛ちゃん花陽ちゃんと一緒になつたからか、穂乃果ちゃんしつかりしてきたのかもね」「……いつもこの調子でお願いしたいものです」

海未は苦笑すると、ことりと共に穂乃果の後ろを追つた。

テロス密林のBCへと小舟で到着した三人は、すぐそばにもう一つ小舟が停泊しているのを見つけた。

「あれが、ドンドルマから来たハンターさんのだよね？」  
「そのはずですが……本人が見当たりませんね」

海未がBCを見渡すが、そう広くないBCに隠れられる場所など無い。そもそも隠れる必要もないだろうし、ギルドからは『BCにて合流』と言わっていたのだ。小舟を降りた三人がキヨロキヨロしていると、

「……ねえ、何か臭わない？」

ことりが二人を呼び止めた。  
「何かつて？」

「嗅いだ事のある臭い……。これって……」

「――“ペイントボール”の臭いですね」

臭いを嗅ぐ穂乃果の言葉を、海未が引き継ぐ。

“ペイントボール”。割ると強烈な臭いを放つ“ペイントの実”と接着作用のある“ネンチャク草”を調合する事で作れるアイテムである。モンスターにぶつける事で、視覚的に見失つても効果が続く限り居場所を特定できる。大型モンスターの狩猟においては必要不可欠。

「……何でその“ペイントボール”的臭いがするの？」

穂乃果のもつともな疑問は、

「“ペイントボール”は自然物ではありません。故に臭いは自然発生しません。誰かが投げない限り、は」

「じゃあ……」

海未は肯定とばかりに額を押さえる。

「…………この狩場には、私達以外に人間は一人しかいないはずです。——合流予定のハンター、ただ一人だけしか」

深々とため息をついた海未は、

「四人での狩猟なのに、まさかクエスト開始前から単独行動を取るとは……。穂乃果の暴走が可愛く見えてしまいます」

怒りと呆れのこもった声を吐き出した。

「……とにかく、ここで待つていてもどうにもなりません。勝手に始めてしまったのなら、今からすぐ合流しましょう。支給品を——」

「無いよ」

「……何ですって？」

穂乃果の声に、海未は顔を上げた。

「支給品ボツクス、空っぽ」

慌てて駆け寄った海未。

「そ、そんな馬鹿な。ギルドからの支給品が配達されているはずです！」

ボツクスを確認した海未は、

「な、何故……」

何一つ入っていないボツクスに愕然とする。

「ギルドが配送を忘れた……？ いやしかし、今までそんな事は一度も無かつた……。

——まさか

海未はとある仮定に思い至る。

「穂乃果、ことり、急ぎますよ。——もしかしたら、今回の同行者は予想以上に曲者かも

しません」

「えっ、ちよ、海未ちゃん!?」

「ど、どうしたんだろう……」

駆け出した海未を、二人は慌てて追いかける。

“ペイントボール”の臭いは、海岸に面した広いエリアから漂っていた。潮が引いている時間帯ならば、砂州を渡つて沖の陸繫島まで歩いていける。

「——ギギ……」

自然形成された岩のアーチをくぐつた先でまず目に飛び込んできたのは、巨大な一本角が特徴的な竜の頭骨。当然骨なので生きてはいないが、口の部分が動き何か生き物の影響を受けていると分かる。

足音でこちらに気付いたのか、頭骨はゆっくりと向きを変える。ようやく見えた頭骨の主、ダイミョウザザミは巨大な蟹だった。赤と白の体色に、左右の大きな爪。口元からは激昂し白い泡を吐き出していた。

「こつちー。」

颯爽と回り込んだ穂乃果を視界に捉えたダイミョウザザミは、そちらへと歩みを進める。その隙を突いて、海未が弾を撃ち込む。穂乃果の反対側からはことりが接近し、狙

いを分散させる。

「あれは……！」

ダイミョウザザミが移動した事で、その足元にいた人物が姿を現わす。小ぶりな刃を両手に携える、双剣にカテゴリされる『ボーンシックル改』をやたらめつたら振り回し、脚に乱舞を叩き込んでいた。場所を移動された事で、半分以上は空振りしていたが。

「……あのが、問題のハンターのようですね」

激しく動いた事で同じように揺れる黒髪のツインテールを眺めながら、海未は苦々しく呟いた。

「乱舞してんのに動くんじやないわよ——つて……あれ？」

「どりやあつ！」「やつ！ たつ！」

悪態をついたハンターは、ここで初めて斬撃を繰り出す穂乃果とことりの存在に気付いた。そして、海未にも。

「ギギギ……」

突然の加勢に驚いたのか、ダイミョウザザミは大きな爪を使い地面に潜つた。小さな地響きの後、ペイントボールの臭いは離れた森の中へ。

「……移動したみたいね」

ツインテールのハンターは武器をしまうと、すぐに走り出そうとする。

「——待ちなさい」

だが、海未が背後からそれを阻止する。

「…………」

仕方なく足を止めたハンターは、仏頂面で振り返る。

「…………何よ」

「あなたが、ドンドルマから派遣されたハンターですね？」

「そうだけど、見れば分かるでしょ？」

「何故、勝手に単独行動をしたんです？ ギルドからは、B C で合流するように言われていましたよね？」

「アンタ達が遅かつたから、先に始めたのよ。何か文句ある？」

「何ですかその言い方は……！」

「う、海未ちゃん落ち着いて！」

思わず一步踏み出した海未を、ことりが制止する。

「あなたには、パーティ行動するつもりは無いんですか……!?」

「クエストを達成できるなら、そんなの何でもいいわよ。——もういい？ ボール』の効き目切れちやうんだけど」

“ペイント

「あなた…………つ！」

爆発寸前の海未を、ことがりが辛うじてなだめる。

「——ねえハンターさん」

横で見ていた穂乃果が、口を開く。

「クエストをクリアできるなら、方法は何でもいいんだよね？」

「そうよ。手段を選ぶ意味なんてないもの」

「じゃあ、一緒にやろうよ！」

「…………はあ？」

笑顔を向けた穂乃果に、他の三人が首を傾げる。

「方法が何でもいいなら、協力して狩猟しても問題ないって事だよね？」

「いやそれは…………確かに、そうだけど…………」

反論しようとしたものの、材料が無く口をつぐんでしまうハンター。

「じゃあそうしよう！ その方が早く終わるし、いい事ばっかりだよ！」

「何なのよアンタ…………」

げんなりとした表情のハンターは、

「じゃあ改めてよろしくね！ ハンターさん！」

「——によ」

「え？」

「にこ。私の名前よ」

「じゃあにこちやんだ！ よろしくね！  
ちがことりちゃん！」

終始楽しそうな笑顔の穂乃果に、

「何なのよアンタは……」

にこはげんなりして肩を落とした。

私は穂乃果！ こつちが海未ちやんで、こつ